

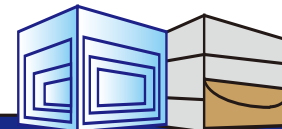


兵庫県立大学減災復興政策研究科

Graduate School of Disaster Resilience and Governance

津波に強い地域づくり

兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
阪本真由美



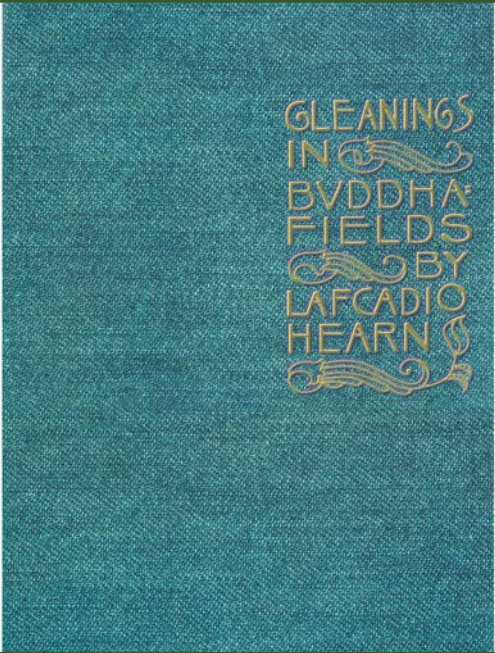
濱口梧陵（1820～1885）

- 和歌山県広川町（廣村）
- ヤマサ醤油当主
- 安政南海地震（嘉永7年11月5日：1854年12月24日）後に津波が来ると考え、稲わらに火をつけて、住民に避難を働きかけた。
- 私財を投入し、広村堤防を建設し、雇用創出・被災地の復興に尽力。
- 私塾「耐久社」（耐久中学校）を開設し若者の育成に尽力。

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）

1850-1904（在日期間：1890-1904）

- 三陸地震津波（1896年6月15日）のような被害は、明治時代以前にも日本にはあった。
- 三陸地震後に、昔聞いた話を思い出した。自分自身の財産ともいえる稲わらを燃やして住民の避難誘導を行った人の話である。

The image shows the front cover of the book 'Gleanings in Buddha Fields' by Lafcadio Hearn. The cover is a dark teal or green color with a textured surface. The title and author's name are printed in a gold or yellow color. The text is arranged vertically, with 'GLEANINGS' at the top, followed by 'IN', then 'BUDDHA', 'FIELDS', 'BY', 'LAFCADIO', and 'HEARN' at the bottom. There are decorative flourishes between the words 'IN' and 'BUDDHA', and between 'FIELDS' and 'BY'.

GLEANINGS
IN
BUDDHA
FIELDS
BY
LAFCADIO
HEARN

A Living God 「生神」

“Gleanings in Buddha Field,” Houghton
Mifflin Company of Boston & New York,
1897

- 1章 日本における神とは
- 2章 地域における規範
- 3章 生神

教科書教材としての投稿

文部省・教科書教材の公募

(文部時報) 昭和8年 (1933年) 10月21日

尋常小学修身書及小学国語読本 (尋常科用) 資料募集



中井常蔵

有田郡湯浅町生まれ(執筆当時28歳)

耐久中学校→和歌山師範学校

和歌山県日高郡南部尋常高等学校小学校

「津波美談 燃ゆる稲村」

→「稲むらの火」

入選作 (賞金10円27編)

災害時の「共助」の大切さ

「稲むらの火」における「共助」

- ①自己犠牲に基づく「共助」
- ②災害時の義務としての「共助」

* 稲むらの火

庄屋の五兵衛が、地震後に津波が来ることを予見し、高台においてあった稲束に火を放ち、それにより住民を高台に避難させた。

自己犠牲による共助

「もったいないが、これで村中の命が救へるのだ」

Hurried with it to the fields, where hundreds of rice-stacks, representing most of his invested capital, stood waiting for transportation

畑に急いで行った。そこには、彼のほぼ全財産である、出荷を待つばかりの数百の稲束があった。

- 全財産である稲わらを焼いてまでして人を救った。
- 全財産を「すべて」焼いた「火」が村人を救った。
そこに、五兵衛の思慮深さ、懸命さを見る。

武内好将「小学校国語読本総合研究巻十」岩波書店1939

自分を犠牲にしても、人のために尽くすこと

共助の「義務」

「火をつけたら、村人は助けに来るに違いない」
←「共助」に対する信頼
災害は地域の「共助」で対応。

The obligation of mutual help in time of calamity or danger was the most imperative all communal obligation. Everybody was required to give immediate aid to the best of his or her ability. Even children were not exempted to from duty.

Lafcadio Hearn, Gleanings in Buddha Fields, 1997

災害や緊急時の共助は、すべての地域の義務の中でも最も厳しいものであった。火事の際は、全員が出来る限りの支援を行うことが求められた。子供でさえこの義務の例外ではなかった。

About certain laws-or, more correctly speaking, customs having all the force of laws, by which many village communities were ruled in pre-Meiji times. These customs were based upon the social experience of ages.

Lafcadio Hearn, Gleanings in Buddha Fields, 1897

明治以前は、集落は法というより慣習によって規定されていた。慣習は、年長者の社会経験により決められた。倫理的、個人的、宗教的であれ、それにより支配された。彼らは、平和を守り、共助と相互扶助を大切にした。

1946年昭和南海地震による被害

	死者	行方不明者	負傷者	全壊	半壊	流失	浸水	焼失
高知県	670	9	836	4865	9073	566	5608	196
和歌山県	187	74	846	946	2427	386	11815	2399
徳島県	181	19	217	1329	1138	582	4578	
香川県	52		273	608	2409			
兵庫県	49		59	640	602		786	
愛媛県	26		32	586	831		330	
大阪	32		46	261	217	552	7080	
三重県	71		35	136	110	23	1435	
岡山県	51		187	1092	3757			
岐阜県	13		42	547	751			1
愛知県	10		19	175	198			1
島根県	9		14	139	308			
大分県	4		9	25	16			
鳥取県	2		3	22	13			
熊本県	2		1	9	6			
滋賀県	3		1	8	2			
奈良県	0		6	36	20			
長野県	0			2	4			
静岡県	0		2	0	0		296	
広島県	0		3	49	74			1
宮崎県	0		1	0	3		1165	
計	1362	102	2632	11475	21959	2109	33093	2598

内務省警保局による調査結果

- 高知県、和歌山県、徳島県、香川県、兵庫県、三重県、岡山県の被害が大きい
- 高知県、和歌山県、徳島県、兵庫、大阪府は津波による被害も大きかった

昭和南海地震 和歌山県の被害状況

戸田勝啓さん（当時16歳、耐久中学3年生）

一人で寝ているところに、大きな揺れ。地震の揺れがおさまると知人が「津波だぞ、早く逃げろ」と叫び走った。村民の多くは、慌てて高台に駆け上がった。

道すがら、避難する人は道中の田んぼの稲わらに火を放ちました。夜空にあおられ、かがり火はあたりをこうこうと照らして、あたかも安政の再現ともみまがう風景でした。地震後40分ほどした時に津波が押し寄せてきました。

戸田勝啓氏（宇佐美龍夫、「昭和南海地震津波体験記-戸田勝啓氏の書簡」『「なみ」の反故拾い』平成12年太平洋印刷社）。

中央気象台報告

- 森田稔「津波の襲来と住民の退避状況について」仙台管区気象台 中央気象台「昭和21年12月12日北海道大地震調査概報」（昭和22年5月1日）
- 12月28日～1月9日まで調査を実施（和歌山県田辺市新庄、湯浅、広村、徳島県牟岐町）
- 調査結果
 - 被災地を通じて一般的に避難はよく行われた。
 - 地震後津波の来襲が早かったの拘らず被害の少なかった一つの原因は、被災地一帯の人々の津波に対する警戒と、相当の予備知識のため
 - **偉人濱口御陵を生んだ紀伊方面では更に一種の郷土的誇りを以て津波に関することが語り継がれていたらしく、そのため津波に対する住民の平素の心構えは他の地方におけるよりも一層十分に出来ていたと認められる。**
 - **新庄の国民学校では機会ある毎に郷土地理としての津波教育を児童達に施していた。**

災害時の「共助」

「稲むらの火」における「共助」

- ①自己犠牲に基づく「共助」
- ②災害時の義務としての「共助」

現在の「共助」

- ③ 行政を補完する「共助」
 - ④いざというときに助けあう「共助」
- 「共助」があったから・・・

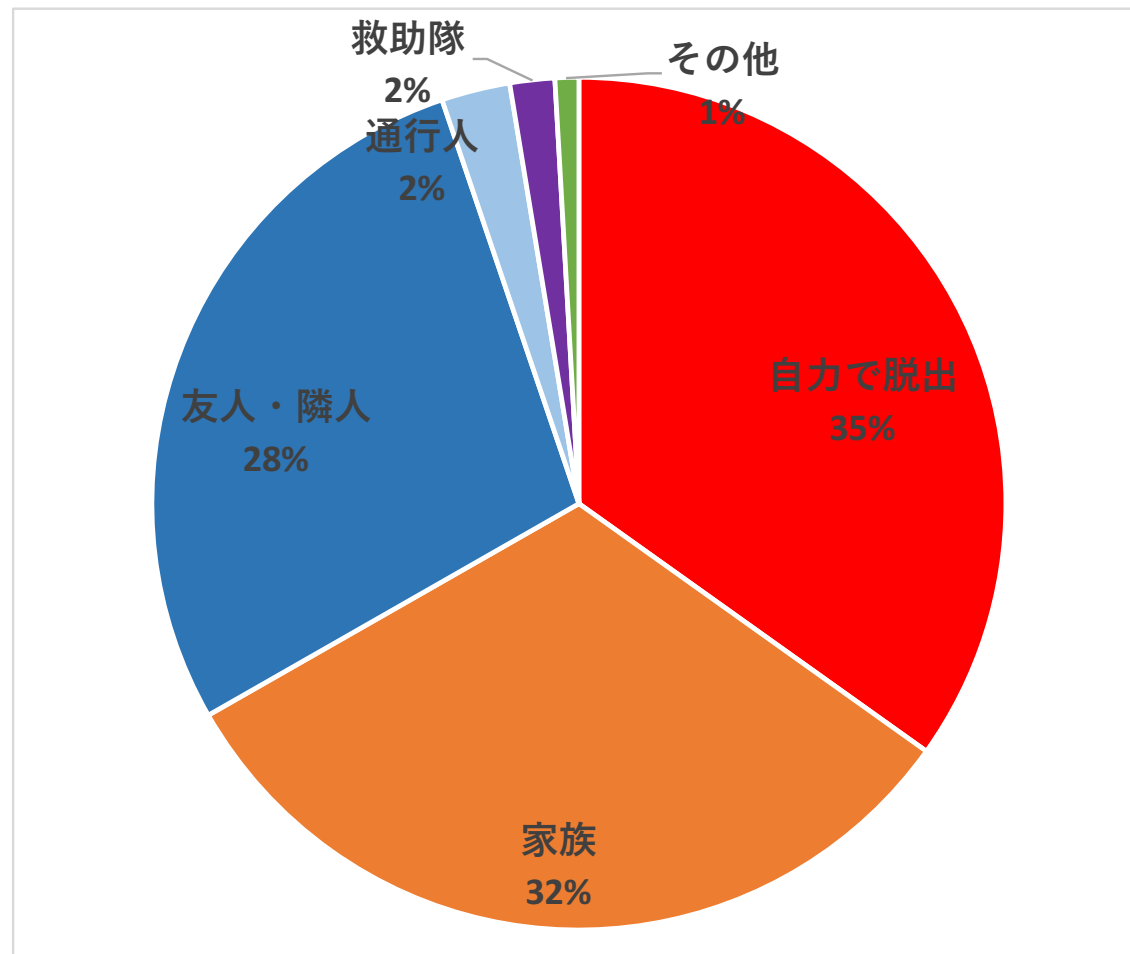
③行政を補完する「共助」



大規模災害：行政も被害を受ける。支援を提供することは困難。

④災害時に互いに助け合うことの重要性 「共助」があったから・・・

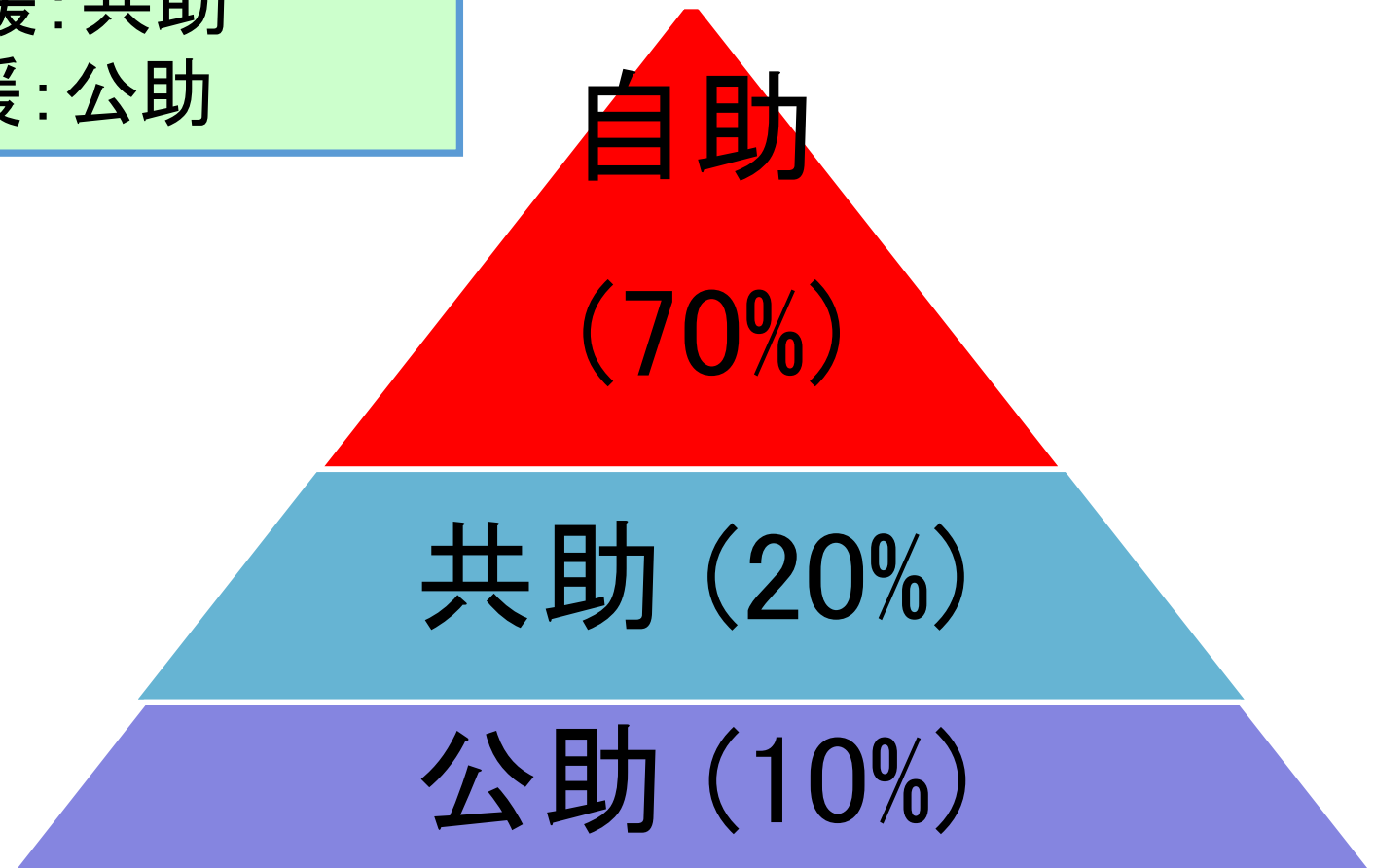
生き埋めや閉じ込められた際の救助方法



日本火災学会「1995年兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書」1996年より

「誰が」 命を守るのか？

自らの努力：自助
地域の相互支援：共助
行政からの支援：公助



行政：支援者、地域の人：受援者？

サービスを提供する人



災害対策基本法

防災基本計画

県地域防災計画

市町村地域防災計画

サービスを受ける人



地域住民が地区災害対策本部を設置

3月11日 広田地区災害対策本部設置

広田地区コミュニティセンター→広田小学校



わかめ用アルミローラーを
物資運搬に活用

地域が主体・市と連携した災害対応

○全体会合(毎日7:30～)

(参加者)

市役所、自主防災組織、中学校代表、
広田診療所、消防団後援会、市会議
員、漁協、交通安全会など

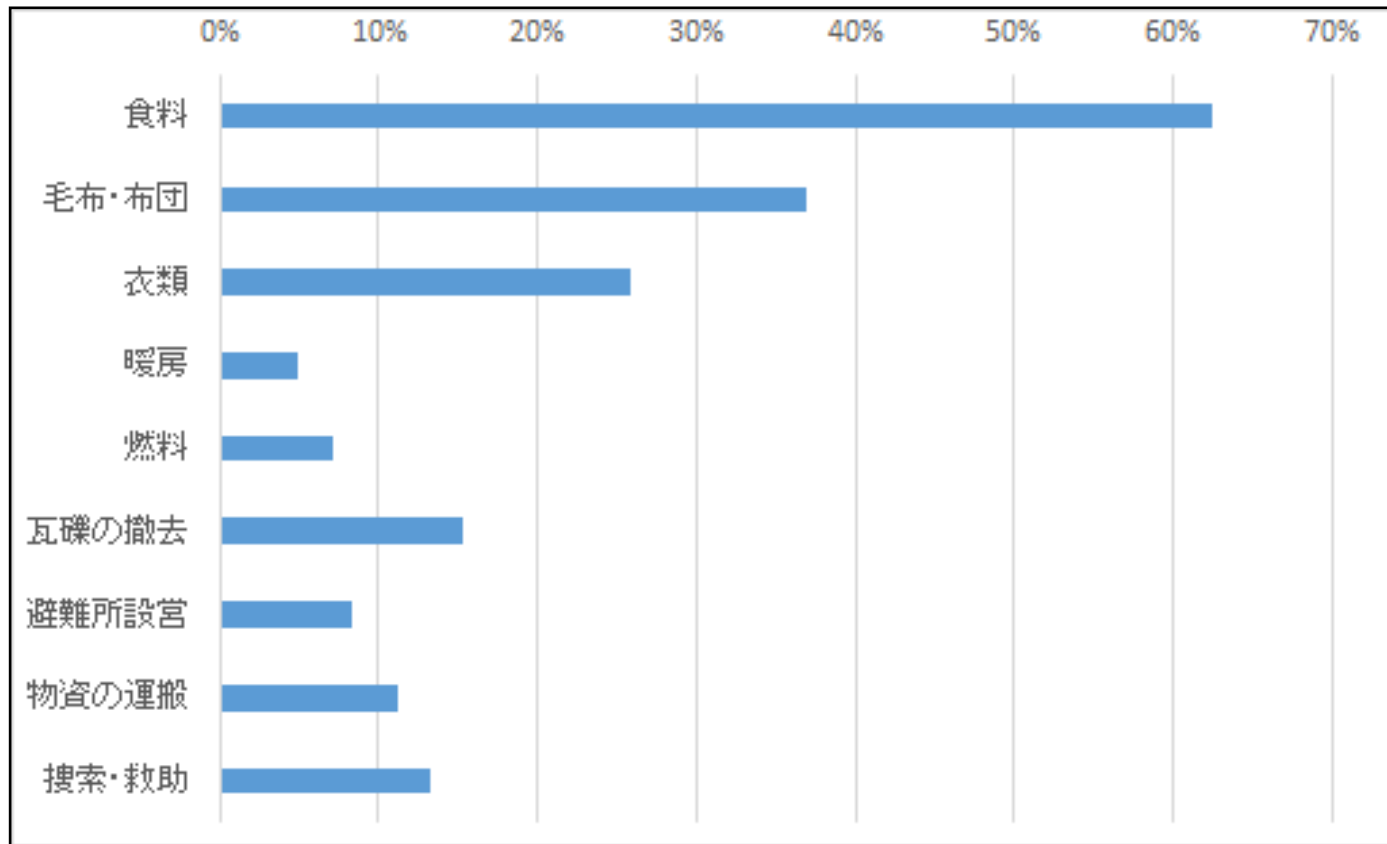
○自主防災会議(毎日13:00～)

(参加者)

市役所、町内自主防災会(7地区)、交
通安全協力会、民生委員、警察、女性
会

住民間の「共助」

災害から3日間地域間で行った相互支援の内容(n=801名)



- 地域の人が食料・物資を持ちより対応。
- 被災していない地区が輪番で物資対応支援

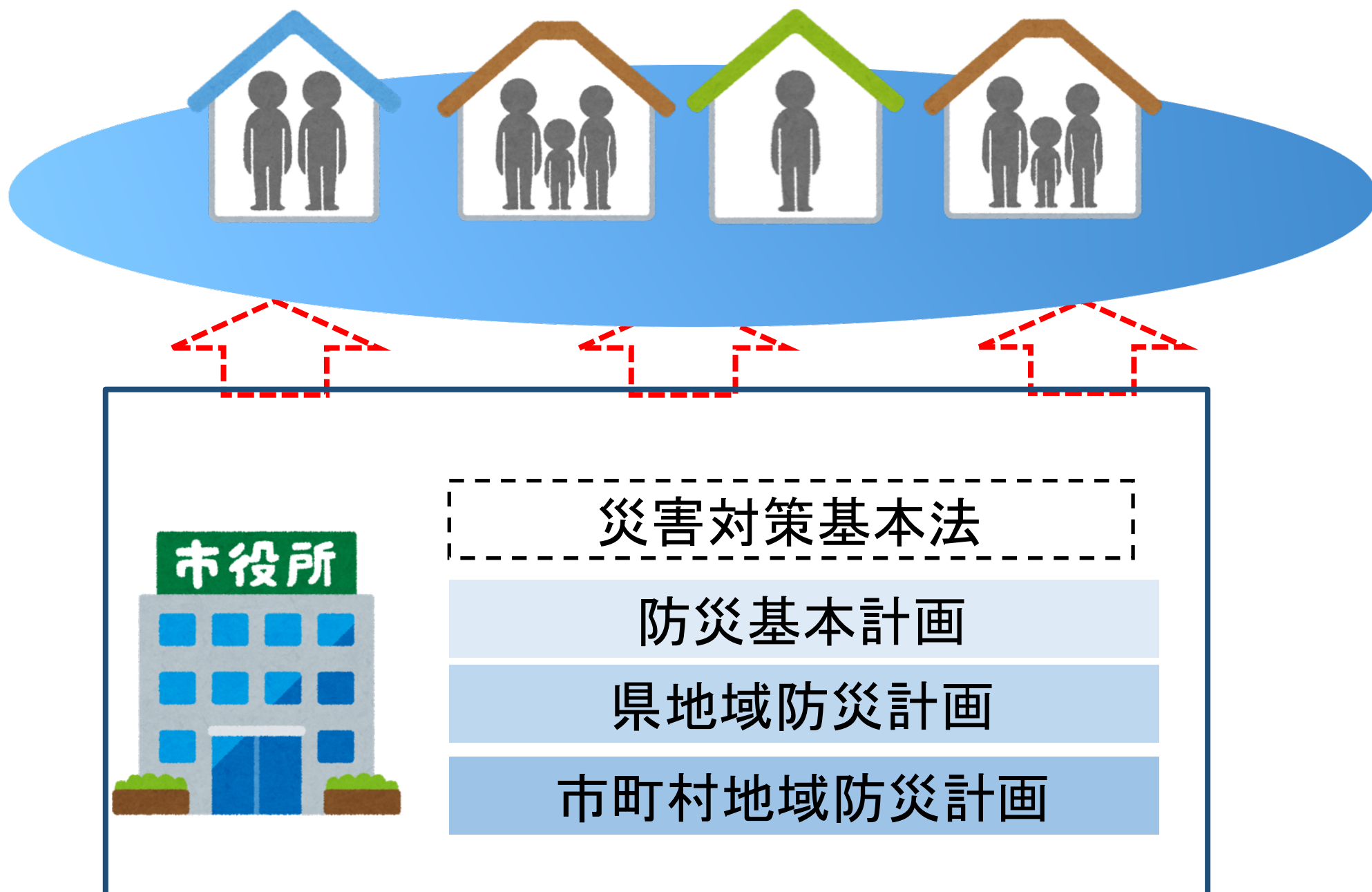
自主防災組織が活躍

- ①地区住民の避難誘導
- ②地区住民の安全確保（安否確認／夜警による治安維持）
- ③地区の被害状況の把握（死者・行方不明者、住宅被害、住民避難状況）
- ④避難所の運営
- ⑤食料・物資調達
- ⑥地区災害対策本部との連絡調整
ボランティア・自衛隊など外部支援との調整

釜石市松倉コミュニティセンター

- 市の指定避難所ではない。
- 地震発生直後から多くの人が自主的にセンターに集まった
- 食糧を持ち寄りガスも知り合いの業者に依頼し早期に復旧させた。
- 近隣の避難所にも炊き出しを届けた。
- 沿岸部から多数の人が避難。約80名が避難生活。
- 市より、「指定避難所」ではないといわれ、被災者は、体育館に、生活環境が悪くなった！

地域が主体：行政は地域のサポーター



災害時「共助」が機能する地域の特徴は？

- 地域主体の問題解決を目指している。行政に頼らない。
- 地域住民間で顔の見える関係が構築されている
- 地域の資源をよく知っている（重機、井戸、看護師・介護士など）
- 災害時に、自分がどのように行動するのかを知っている
- 一人一人が役割を持っている（やりたくない人も参加している）

防災計画は地域が作る

平成25年6月 災害対策基本法改正

災害対策基本法（第四十二条の二）

地区居住者等は、共同して、市町村防災会議に
対し、市町村地域防災計画に地区防災計画を定
めることを提案することができる。この場合に
おいては、当該提案に係る地区防災計画の素案
を添えなければならない。

地域の「提案」を行政の「地域防災計画」に

地区防災計画を通じた地域づくり

災害対策基本法

防災基本計画

県地域防災計画

市町村地域防災計画



地区防災計画

地区防災計画で考えること

地域の実践的な災害対応体制を考える

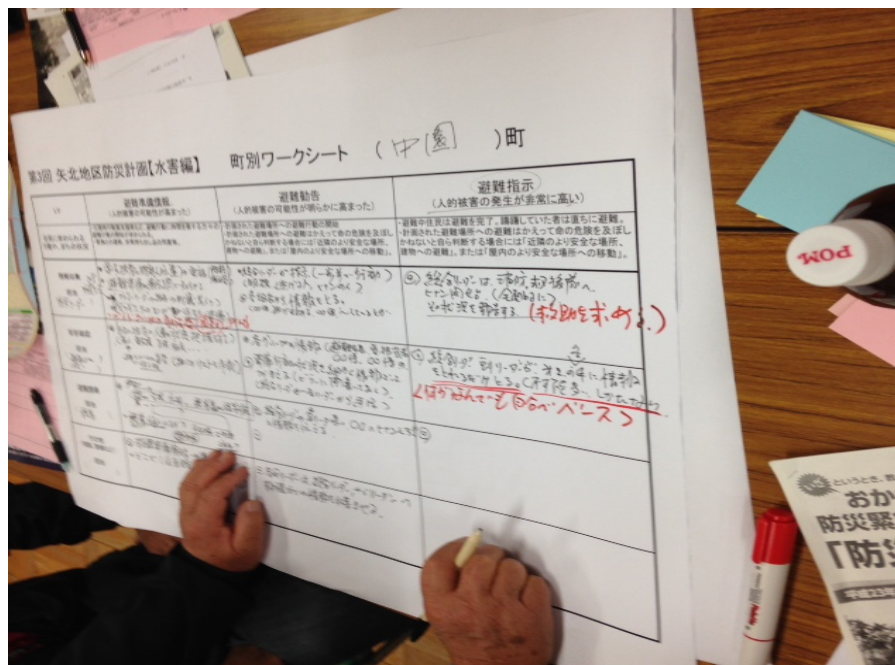
1. 地域のハザード・資源をよく知る（避難所、重機、井戸、看護師・介護士など）。
2. 災害時（安否確認・連絡・避難所運営・物資配布）に、地域の誰がどのように行動するのか、一人ひとりの役割を明確にし、それを共通の認識とする。
3. 継続する仕組みを作る。

「誰か」ではなく「全員」が
役割を持ち防災に取り組む体制作り

地区防災計画WS

目的：災害時の自分たちの役割を確認

参加者：矢作北学区内 6 町三役（各総代、副総代、会計）



- ・災害時の避難場所を再検討する。
- ・在宅避難のための備えを進める。
- ・避難場所では住民情報を把握するためのリスクとの更新

地域防災における防災の担い手

地域における防災リソース

男性

- ・町内会
- ・自主防災組織
- ・消防団

女性

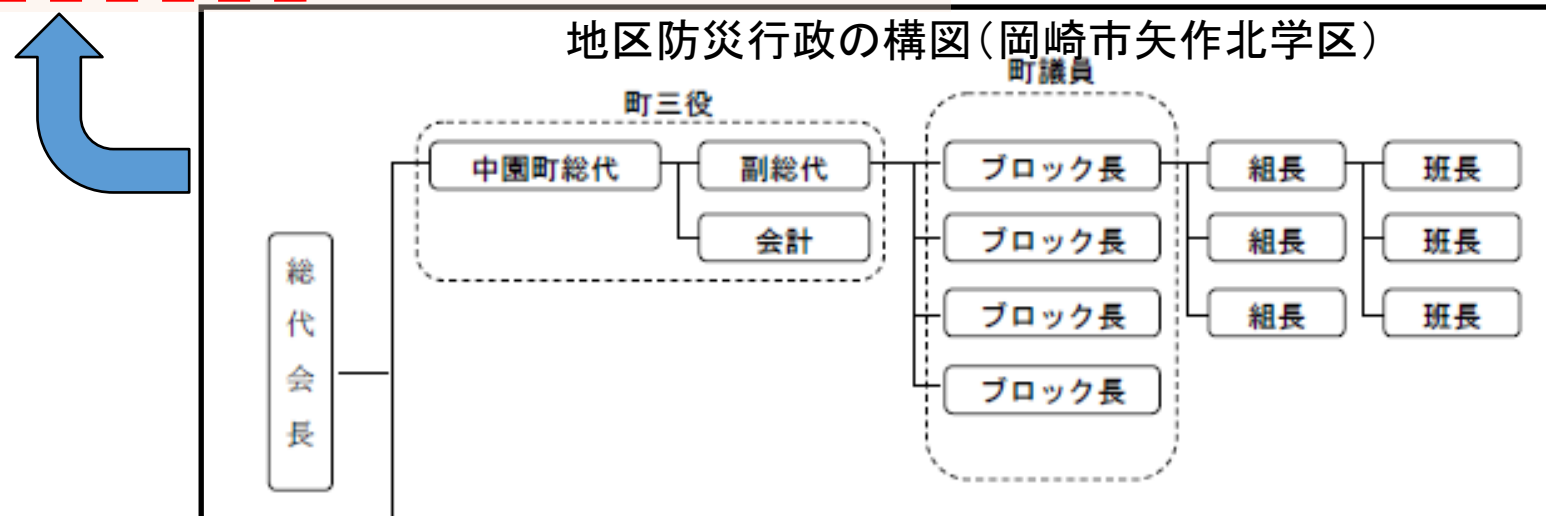
- ・地域婦人連合
- ・婦人防火クラブ
- ・赤十字婦人奉仕団

- ・地域防災リーダー
- ・赤十字奉仕団
- ・PTA

課題

- ・男女分業の傾向
- ・若い世代の参画が見られない

地区防災行政の構図(岡崎市矢作北学区)



多様なセクターの参画は豊かな地域を作る

災害時の避難場所・避難ルートは子供と大人では考え方が違う

女性は地域の情報に詳しい。また子供の行動もよく知っている。

女性の参画によりわかること

- ・ 子供/家族の行動に詳しい。
- ・ 地域の資源に詳しい（店舗・施設・公園など）
- ・ 近隣の住民関係に詳しい。
- ・ 家庭防災・避難所対応に対する関心が高い

多様なセクターとの連携が、災害に強い地域をつくる

まとめ

災害時の「共助」 4つの意味

- ①自己犠牲に基づく「共助」
- ②災害時の義務としての「共助」
- ③行政を補完する「共助」
- ③「共助」があったから・・・

災害に強い地域をつくるには
「誰か」ではなく地域全員が役割を持ち
防災に取り組む体制を作る